資料1

地域構造の保持・形成に向けた検討状況

名寄周辺モデル地域圏域検討会

地域構造の保持・形成に向けた検討過程

H29.9.29　行政連絡会議	・地域の現状と課題の共有 ・生産空間を支える施策の検討 ・検討会スケジュールの確認
H29.11.6　検討会（第１回）	・地域の現状と課題の共有 ・生産空間を支える施策の検討 ・意見交換
H29.12　追加ヒアリング	・地域の現状と課題の共有 ・生産空間を支える施策の検討
H30.1.29　ワーキングチーム（第１回）	・施策パッケージ（案）の検討 ・今後の具体的な取組の実行検討、調整（物流等）
H30.2.21　ワーキングチーム（第２回）	・今後の具体的な取組の実行検討、調整（施策・推進方法等）
H30.3.7　ワーキングチーム（第３回）	・今後の具体的な取組の実行検討、調整（観光関連）
H30.3.22　検討会（第２回）	・第１回検討会、WTの議論を踏まえた施策パッケージ（案）の提示、意見交換 ・次年度以降の取組確認

名寄周辺モデル地域圏域検討会（第１回） 開催概要

・11月6日(月) 14:00から、名寄市の駅前交流プラザ「よろーな」において、第１回名寄周辺モデル地域圏域検討会を開催。
・ファシリテーター、学識経験者、5市町、北海道、地元関係者等の構成員19名、報道機関8社を含め約100名が参加。
・ファシリテーターの石田日本大学特任教授より、「生産空間の意義と課題」と題してご講演、その中で行政のみならず各地域の関係者がプレイヤーとして主体的に活動することが重要と指摘。
・「名寄周辺モデル地域の地域構造の課題、施策の方向性について」をテーマにディスカッションを実施。各出席者は、社会インフラのみならず、地域医療・人材育成、物流、観光など、この地域の今後の課題について議論。
・今後、ワーキングチームにより地域の課題や課題の解決に必要な施策などを検討。これを踏まえて、次回検討会では施策パッケージの検討を行う予定。

会議の様子

石田先生の講演

柳屋審議官挨拶

和泉局長挨拶

【検討会出席者：敬称略】

・（ファシリテーター）日本大学 特任教授	石田東生
・名寄市立大学 保健福祉学部 教授	瀬戸口裕二
・美深町観光協会 事務局長	小栗 卓
・株式会社Dkdo　取締役	黒井 理恵
・三井不動産株式会社 社会・環境推進室　室長	杉本 健一
・北ひびき農業協同組合　地区筆頭理事	中山 義隆
・名寄商工会議所 会頭	藤田 健慈
・北星信用金庫　地域支援部長	森 茂樹
・名寄市	
・士別市	
・剣淵町	
・下川町	
・美深町	
・北海道 上川総合振興局	
・国土交通省 北海道局	
・国土交通省 北海道運輸局	
・国土交通省 北海道運輸局 旭川運輸支局	
・国土交通省 北海道開発局	
・国土交通省 北海道開発局 旭川開発建設部	

〇オブザーバー
和寒町、音威子府村、中川町、幌加内町

名寄周辺モデル地域圏域検討会（第1回） 主な意見

【人材育成・確保】
・課題としては、地方の街づくりに関わろうとすると、何らかの組織に所属しなければならず、二の足を踏む傾向がある。
・人材育成は行政と市民の信頼関係が必要。予算がつきづらい分野でもある。

【雇用創出、促進】
・農業法人の活躍に大きく期待。多様な人材を雇用でき、名寄には自衛隊があり、階級によっては定年が速いので、定年後農業法人で活躍して頂く等のやり方がある。
・問題点としては、働き手の確保があげられる。医療・福祉分野の働き手が少なく、農業の有効求人倍率が非常に高い。
・「孫ターン」が増えてきており、若者の働く環境を作る必要がある。
・就職は、札幌の一人勝ち。大学、高校にも協力して地域の人材確保に努めているところ。
・農業法人は現在5つあり、Uターンの就職の受け皿になっている。
・士別は、愛媛農大から実習受け入れが52年間続いており、ここで働きたいと言ってくれる人もいる。

【農業】
・この地域は、水稲、酪農、畑作がバランスよく展開しており、この地域の農業は稼ぐ力があると思う。
・農業は大規模化が進んでいない地域もあるが、生産性は向上している。
・農林業の町であったが林業が衰退。農家数は減っているが、後継者のテコ入れ、担い手対策の支援体制を整えている。

【観光、まちづくり】
・まちづくりでは、経営資源を考える必要があり、他地域や企業と連携協定を結んで経営資源を補っている。
・街の中に「道の駅」ならず、市民が交流できるような「街の駅」をつくりたい。
・高速道路のPAに絡めて「道の駅」の入込を増やしたい。
・自動車関係のテストコースの道内28の中、9つが上川北部。そのため、自動車関連産業の多くの職員による出張滞在がある。
・スポーツ合宿も一定数の安定宿泊者がいる。
・旭川以北の道北については、観光のイメージがなく、新しいイメージを作りたいと考えている。
・現在北海道という自然環境の厳しいことを売りに上級者向けのキャンプツアーを開催しているところ。
・20年先に、一人一人が暮らしを楽しむ精神を持った街づくりをしていきたい。

【医療、環境、物流、その他】
・地方創生の原点は地域医療、地域医療なくして地方創生はあり得ない。
・住民の足の確保、医療、広域でやれることは取り組んでいるが、自治会機能が弱まっている。
・北海道は、太陽光、風力、木質バイオマス、屎尿バイオマス、雪氷冷熱等のエネルギー資源が魅力的と思う。
・生産空間からの物流を小さい車で一か所に集積してから運ぶようにすれば、ドライバーが夜には家に帰れるようになる。
・貨客混載は、北海道のような広域分散型社会に適しており、名寄地区を含む全道各地へ拡大していきたい。
・ 2011年以降人口減少に拍車がかかっており、定住自立圏の取組事態の効果検証をしていく必要がある。
・核家族化が進んでいる中、積雪寒冷地ということで、除雪が大変で住み続けにくいという声がある。
・生産空間のコンセプトを経済優先から生き方優先に作り替えたい。

名寄周辺モデル地域圏域検討会ワーキングチーム（第１回） 開催概要

・1月26日(月) 13:00から、名寄市の駅前交流プラザ「よろーな」において、第1回名寄周辺モデル地域圏域検討会ワーキングチームを開催。
・9市町村、北海道、地元関係者等の約50名が参加。
・ 3月22日(木) に開催を予定している第2回検討会に向け、施策パッケージの骨子に係るテーマ（物流・人流、食・農林水産業、観光、まちづくり、安全・安心）について、意見交換。
・ワーキングチームの議論を踏まえ、次回検討会で施策パッケージ（案）として検討する予定。
・今後のワーキングチームについては、テーマ毎の取組を着実に進めるために、取組内容に応じて機動的に開催し、掘り下げた議論ができるよう参加メンバー及び人数等は柔軟に対応できる形式とすることを確認。

会議の様子

物流関係の
意見交換
名寄商工会議所　藤田会頭

安全安心の
意見交換

【ワーキングチーム出席者：敬称略】

・美深町観光協会 事務局長	小栗 卓
・なよろ観光まちづくり協会　理事長	栗原　智博
・株式会社Dkdo　取締役	黒井 理恵
・三井不動産株式会社 社会・環境推進室　室長	杉本 健一
・北ひびき農業協同組合　地区筆頭理事	中山 義隆
・名寄商工会議所 会頭	藤田 健慈
・名寄地域連携物流システム協議会	鎌塚　英明
・名寄地域連携物流システム協議会	佐橋　正二
・名寄地域連携物流システム協議会	松下　賢二
・北星信用金庫　地域支援部長	森 茂樹
・名寄市	
・士別市	
・和寒町	
・剣淵町	
・下川町	
・美深町	
・音威子府村	
・中川町	
・幌加内町	
・北海道　総合政策部　交通政策局	
・北海道 上川総合振興局	
・国土交通省 北海道運輸局	
・国土交通省 北海道運輸局 旭川運輸支局	
・国土交通省 北海道開発局	
・国土交通省 北海道開発局 旭川開発建設部	

名寄周辺モデル地域圏域検討会ワーキングチーム（第１回） 主な意見

【物流・人流】
・車の自動運転等の技術改革はあるが、荷物をどう集積してどう運ぶかが一番大事である。
・入ってくる荷物は宅急便、出て行く荷物は農産物で、圧倒的に片荷になっている。これから少量多品種になっていくにあたって、地域農業が多様性に対応していかなければいけない。
・名寄以北については、宅配をテーマに検討しており、鉄道を活用した貨客混載というのはニーズが強い。
・北海道では、平成30～42年度までを対象とする「北海道交通政策総合指針」を策定中であり、人流・物流が一体となった施策展開を検討している所である。
・トラックの積載率は41%、半分は空気を運んでいるので、共同で2社の荷物を入れていくと効率が図られると思う。
・SPCのようなものを作って輸送形態を考え、バス会社、運送会社に働きかけて新しい料金体系を作っていく必要がある。
・民間宅配業者にこれ以上安く・効率的に荷物を手元まで届けてもらうことは難しくなっていくだろう。物流サービスを維持していくためには、市民側の協力（例えば荷物を駅に保管し、住民が取りに行く）も必要で、そういったモデル的な実験が必要ではないか。
・行政としては制度化もにらんだ支援をしていくべき。

【食・農林水産業】
・国有林や北海道大学との連携により新たな分野、木質バイオマス等の分野に取り組んでいきたい。
・農業高校で勉強しても、30ha以上持っていないと生活できない。一番最初の投資でハードルが高く、地元で勉強しても働く場所がない。
・農業に関する専門的な学校、木工、手芸等もできる専門学校が必要。
・冬季スポーツのアスリートを将来名寄に住まわせていくため、夏は農作業をやりながら練習するというような酪農ヘルパーのような人材バンクが作れないか。
・商業高校や農業高校がなくなってきている。大学でなくても良いので研究所を誘致することはできないか。

【観光、まちづくり、人材育成・確保】
・観光分野では圧倒的に人材が不足している。アイデアを持っている人材は増えてきているが受入体制が整っていない。
・ここ数年で、田舎に来たいという人は多いが、そういった人材を受け止められていないのが現状。観光から農業へ紹介するような仕組みがあると良い。
・町に来る修学旅行の受入依頼では、ほぼ100%が農家民泊の要望。北海道でも受入ができる場所は限られている。
・インバウンドを受け入れるにあたってインストラクター、ガイドがいない。昨年から講習事業もやっているが、実際に観光ボランティアとしては活動していただけない。
・JRで名寄まで来ていただき周遊してもらうメニューがあるが、二次交通がないと滞在してもらえないため、路線バスの周遊パスポートの実験を行っている。
・単体市町村でのすべての受入、紹介は困難。そういった時こそ広域連携で体験メニュー等地域内で紹介ができれば、すべてを受け入れられる。
・名寄は地域の中心地としてハブになるような役割に徹底し、美深町や下川町とか連携することが必要ではないか。
・地元の小麦を使ってビアフェストをやるなどの動きができれば目玉になる。

【安全・安心】・町内会みずからが避難訓練ができる体制を構築しており、住民自身の危機管理を高めていきたい。

名寄周辺モデル地域圏域検討会ワーキングチーム（第2回及び第3回） 主な意見

○ワーキングチーム（第2回）

日時：平成30年2月21日（水）15：00～
場所：駅前交流プラザ「よろーな」

【出席者：敬称略】
・名寄市立大学 保健福祉学部 教授　瀬戸口裕二
・株式会社Dkdo　取締役　黒井 理恵
・北ひびき農業協同組合　地区筆頭理事　中山 義隆
・名寄商工会議所 会頭　藤田 健慈
・北星信用金庫　地域支援部長　森 茂樹
・国土交通省 北海道開発局 旭川開発建設部

【主な意見】
・名寄周辺モデル地域の取組について、幹の施策と、枝葉の施策に分けて考える必要がある。物流は共通の課題であり、分かりやすい課題なので共通項になる。
・それぞれの地域で特色のある農産物を生産しており、道北ブランドとしてのメージを高める議論をし、対都会向けの戦略を進められれば。
・名寄がどのような中心地区になるのか。札幌や帯広と違う。名寄がすべてを引き受けるのではなく役割分担が必要。
・対地元向けのイベントと対都会向けのイベントの整理が必要。地域の人たちが楽しむイベントも必要である。
・農業とITなど地域の教育環境を作ることが必要。
・オリンピックで地域出身の若者が活躍している。いろんな分野で頂点を目指すような教育が必要。
・農業に対する数値目標（5年後の農業法人数など）を設定するなどの共通施策やリーディングモデルを作れたら。
・「ゆるやかな連合体」であることを意識づけていくことが重要と考える。共通課題で成功モデルを作ることが重要。
・百花繚乱の取組から、できないことを引き算することが必要。

○ワーキングチーム（第3回）

日時：平成30年3月7日（水）13：20～
場所：駅前交流プラザ「よろーな」

【出席者：敬称略】
・美深町観光協会 事務局長　小栗 卓
・なよろ観光まちづくり協会　理事長　栗原　智博
・なよろ観光まちづくり協会　事務局長　畑中　覚是
・国土交通省 北海道開発局 旭川開発建設部

【主な意見】
・道北地域の観光は富良野美瑛のように確立された物がないため、関係者が少なく機動的に動きやすいことがメリット
・てっぺん（稚内）に向かう交通の柱として、天塩川、国道40号、宗谷本線の3つをそのまま観光化し、3本の移動手段を楽しむ取組が面白い。天塩川は原始、鉄道は近代、道路は現代といった、異なる歴史・文化を味わえるイメージも魅力的。
・JRやバスに自転車が積めたら良いとの要望がある。また、普通列車への自転車持ち込みは、観光だけでなく通学や買い物などでの利便性が高く、駅の放置自転車の問題も解決出来ると思う。
・小型観光の冬季実証実験として、名寄・美深・幌加内の連携で「粉雪ツアー」を実施。広域的にブランド力を向上させる必要がある。冬はツアーコースを作りやすいが、夏が課題。
・観光関連の協議会等が多すぎるので、一本化すればよいと思っているが、国の補助金などの施策毎に受け皿として協議会が出来る。広域観光支援などについて国の制度がすぐに変わることも問題である。
・受入体制としては、宿泊施設が足りない。名寄市内に4施設あるがそれぞれ10人前後の受け入れがちょうど良いイメージ。
・この地域では、外国人観光客の受入体制の整備よりも、地域観光のブランド化を先に進める必要がある。

その他、ヒアリングにおける主な意見

○ヒアリング（和寒町、音威子府村、中川町、幌加内町）

日程：平成29年12月11日（月）～20日（水）

【主な意見】

・カボチャで独自ブランド力を発揮できていない。
・6次産業化もリスクがあるので、商品化を模索。
・補助制度を整備しているが、働き手が不足し奪い合いが起きている。
・スポーツ振興の施設維持に多額の費用を要している、地域でスポーツ振興の連携も必要。
・農業は蕎麦がほぼ100%。地力の維持が不安。
・過疎化が進み共助がなくなり、特に雪の問題では逡巡している。
・村内季節移住を提案し、次年度、実現化を予定。
・豊かな天然広葉樹林を活かした林業の推進。
・日本最北の畑作地帯としての優位性を活かした農業振興。
・農産物の輸送コストを低減させるのが地域の課題
・光ファイバー網が個人利用のみにとどまりIT化に至っていない。
・地域おこし協力隊が核となって地域の可能性を高めている。
・農林業には夢があり、若い世代や女性を惹きつける。
・省力化作物である蕎麦需要が増え、収入増により後継者が戻ってきている。
・医師、診療スタッフ確保のため2年かけ病院を再編
・スタッフ確保のためシングルペアレント対象の支援制度を整備し、3組の実績あり。
・朱鞠内のツアーは好評だが、受け手の人手不足、施設老朽化など課題がある。人材づくりが必要。